

## 尖閣諸島とTPP

安倍政権が環太平洋パートナーシップ協定（TPP）の交渉参加に事実上こぎつけた。私は一貫してTPPに対して慎重な意見を繰り返してきた。それは、TPPは単に関税の撤廃を目的としているのではないからだ。地理的に巨大化したマーケットにはさまざまな文化が存在し、その文化をベースとする様々な価値観がある。このような市場で「経済的公平」の基準を設定する場合、その国独自の伝統や文化によって支えられている価値観はどうしても「特殊なもの」として切り捨てられていくのではないかと不安を覚えた。

参加国間で貿易上の「障壁」と考えられるものはすべて俎上に上げられる。そこで「障壁」と認定されればその修正を迫られるのだ。TPPへの参加は経済問題だけにとどまらず、日本の文化や伝統、価値観に大きな修正を迫る可能性があること危惧していた。

しかし、この考えに迷いが生まれてきた。中国の存在である。TPPを経済問題や国内問題とは違う安全保障の角度から考えなければならない状況になったのだ。TPPには国威発揚を隠さなくなった中国へのけん制の役目もある。

いま、日本人は安全保障とは何かを学びつつある。その教材となっているのが尖閣諸島だ。これまで多くの日本人（私も含めて）は、国土というものは「ここは日本の領土」だと言っておれば保全されると考えていた。しかし近年の尖閣諸島をめぐる中国との確執は、一片の宣言で領土が保全されるほど甘くないことを見せつけた。海上保安庁の巡視船は緊張のない平和時においてもローテーションを組んで離島海域を巡視し、不審船や異常をチェックしているが、普段の巡視船の活動はニュースにもならない。ようやく尖閣諸島問題は領土を守ることがどういうことかを具体的に私たちに知らしめたといえるかもしれない。

日本をとり巻く環境の変化を考えると、TPP交渉参加は大きな流れに沿った選択なのであろうか。

静岡県議会議員

天の一